

りょうし
獵師セクー

トム・マシュー

Chapter I

0

第一章

むかしむかし とお むかし ひと やみ だいち あし ふ い おそ しだい
昔々、遠い昔、人は闇が大地に足を踏み入れるときに 恐れおののいた時代があっ
た。彼は光を求めるのではなく、夜を歩く方法を探し求め、影に付きまといわれるこ
となく 夜を歩けるようにと願った。彼は星々を見上げ、闇の向こう側を恐れた。

せいれき とおいひがし きぬ こうしんりょう はこ ていこく ぜいたく ず
西暦123 年。キャラバンは遠い東から絹や香辛料を運び、ローマ帝国の贅沢好きな
都市の群衆に提供している。エラム、メディア、バビロニア、アラビア、アッシリ
ア、エジプト、アルメニア、カッパドキア、サルディスは、金の花瓶や銀の水差し
と引き換えに銀貨や銅貨が取引されて繁栄している。職人たちは地中海の工芸品に
緻密な装飾を彫り込んでいる。

Capitolo 1

ローマの影響えいきょうはペルセポリスの至る所に見られます。アケメネス朝は、ローマの南
に位置し、インド洋に広がるこの地域の世襲ちいき せしゅう くんしゅの君主であり支配者であり、帝国内で
の通行料を公平に受け取っています。毎日、風が品物で溢れる船あふを運んできます。

人類じんるいは創造そうぞうされて以来、風かぜを制御せいぎょしようとしてきました。この虚栄心きょえいしんを追い求める
ために無限むげんの日々が費やされてきました。あらゆる繁栄はんえいした時代じだい同様、人々ひとびとは自分じぶん
が頂点しんにいと信じています。市民しみんは富とみ、名声めいせい、権力けんりょくを追い求めます。人類じんるいはその
複雑さの中で、海に運ばれる夕べを追い求めます。

風かぜが海うみを駆け抜ける

そして、ペルセポリスを駆け抜け、丘や崖を越えて流れます。これらの岩からは、
ハヤブサたちがペルセポリスの周りを飛んでいるのが見えます。風に乗って、彼ら
は軽やかに旋回します。彼らの巣から見下ろす美しい荒野を眺めながら、彼らは
獲物を探します。

風が循環します。あちこちを駆け巡ります。上下に。そして時折、渦が形成されま
す。ハヤブサは空気を捉えるために翼を広げます。彼女は今日運が良いです。夕べ
の風が空で円を描いて上昇します。彼女は重力と完全に戦わなくても済みます。

ペルセポリスから遠く離れた森の中では、ハヤブサは悪魔が潜んでいることを知っ
ています。動物たちはその悪魔を知っています。彼は時折、彼らの姿を借りて彼ら
の間を飛びます。決して優しい動物の姿ではありません。

彼はよく、土地で最も卑劣な生物の姿を取ります。蛇。ネズミ。オオカミ。ワニ。

悪魔、ミスラは、忘れられた遠い時代から来ました。何千年もの歳月が経ちまし
た。文明は彼の崇拜に対する法律を制定しました。人類はミスラのことを話しまし
てきました。しかし、彼の影響はペルセポリスで見ることができました。

かれ すうはい もの す ばしょ ほし かん あらわ おお ひとびと じぶん
彼を崇拝する者たちが住む場所には、星の冠が現れました。多くの人々が、自分の
いえ いりぐち えんとつ まわ ほし か ほか ひとびと うで あし ほし いれずみ い
家や入口、煙突の周りに星を描くでしょう。他の人々は、腕や脚に星の刺青を入れ
るでしょう。多くの人々が、衣服に星を縫い付けるでしょう。この秘密の言語、ま
しょうちょう かれら あくじ かくす やくだ
たは象徴は、彼らの悪事を隠すのに役立ちました。

じんるい しんじつ し すうはい ばしょ あく
ハヤブサは人類の真実を知っていました。ミスラが崇拝されている場所では、悪が
まんえん どうぶつ ほし い み し かれら ほし うま か
蔓延するでしょう。動物たちは星の意味を知っていました。彼らは、星が馬に描か
れっていると、まもなく人間の犠牲が増えることを知っていました。

ほとん^ど努力^ををせ^ずに、ハヤブサはより高^い高^度に上^昇します。そこ^から彼女^は狩^り
りに従^事する2人^の男^性を見^ます。人^間はどれ^ほど愚^かかな^のか、と彼女^は考^えま
す。狩^りを通^じて永^遠にアイデンティティ^をを探^してい^る。ハヤブサは真^実を知^って
いま^した。捕^食者^と獲^物しかい^ない^のです。狩^りが成^功で^きない^者は獲^物にな^りま
す。

セク^ーは兄^をを見^ます。彼^らは傷^ついたカモシカ^をを追^いか^けな^がら、苦^笑い^をを浮^かべ
る。

空^気が通^り抜^けま^す。彼^の兄[、]アミ^リは、傷^ついた獣^をを追^いか^けな^がら手^にナイフ
を持^ってい^ます。両^者は傷^ついた獲^物を見^つめ、その毛^皮が傷^つか^ない^ことを願^っ
てい^ます。こ^の動^物の皮^は、インダ^ス溪^谷に^戻る^キャラバ^ンにと^って非^常に高^く評
価^される^ため、高^値で取^引され^ます。そ^の栗^色の模^様は特^に好^まれ^ます。

みどりゆた き ぎ つぎつぎ なが かぜ かれ みみ かれ め か
緑豊かな木々が次々と流れていきます。風が彼らの耳をかすめます。彼らの目は狩
しゅうちゅう きょうだいかん きょうそう つね そんざい えもの じまん けんり
りに集中しています。兄弟間の競争は常に存在します。獲物を自慢できる権利はた
しこう どうぶつ かわ かくほ え ぶっしつてき ほうしゅう しゅうちゅう
だ1人。アミリの思考は、動物の皮を確保することで得られる物質的な報酬に集中
していました。

ちけい かれ み ち ぬま なが こ おがわ と こ
その地形は彼らにとって未知のものでした。カモシカは沼に流れ込む小川に飛び込
とつぜん きょだい おがわ と だ くびすじ
みました。突然、20フィートもの巨大なワニが小川から飛び出し、カモシカの首筋
か つ
に噛み付きました。

さけ
セクーは「アフラマズダのひげ! 」と叫びました。

ひき おそ
もう1匹がでてきてアミリに襲いかかりました。かれはよろめいた。セクーはナイ
の と かれ は あつ ずがいこつ つ さ のう はかい
フを伸ばして飛びかかった。彼の刃はその厚い頭蓋骨に突き刺さり、脳を破壊しま

した。「アフラマズタは私にイオニアで最高の剣を授けてくれた。」とアミリが叫びました。彼らは周りを見渡し、何十匹もの空腹のワニが彼らに向かって泳いでくるのを見ました。

セクーは兄を掴みました。「逃げろ！」

彼らは足跡をたどり、沼地に続く小川に戻りました。ためらうことなく、彼らはできるだけ速く森に向かって走りしました。

「今日は、私たちはあの怪物たちのごちそうにはならないよ！」とアミリが笑いました。

「休むぞ、兄弟。そして明日、もう一度挑戦してみよう」とセクーが言いました。

休んでいる間、彼らはオオカミの唸り声うなを聞きました。激しい吠え声はげ ほに続いて、バンシーアイルランドの民間伝承における女性の霊みんかんでんしょう れいのような泣き声ひび わたが木々に響き渡りました。

彼らは立ち上がり、空地あきちに向かって歩きました。そこで見た壮観な光景そうかん こうけいに驚きました。巨大な狼の群れが、鎖かたびらと鎧に身を包んだ兵士を襲っていました。その男の周りには青いオーラが漂っていました。

二匹の狼が彼の足をつかんだ。もう一匹の狼が岩場から突進してきた。兵士は青いはな みじか おの光を放つ短い斧くうちゅう あらわを（それは空中から現れたように見えた）取り出し二匹の狼を殴りはじ な ち なが始めた。狼は鳴いたが血は流れませんでした。この事実がセクーの注意を引きましじじつ ちゅういた。黒魔術だ！ 光輝く男は突進してくる狼に向かい、手に持った光輝く青い剣で狼さを刺しました。

セクーはじっと見つめました。アミリが前に出ました。彼は狼の毛皮けがわが欲しかった。「やめろ。これは黒魔術だ。これは狼ではない」とセクーが言いました。

「黒魔術じょうだん？ 冗談むじゃないよ。これは群れの動物どうぶつだ。毛皮が欲しいんだ、セクー」とアミリがささやきながら、ゆっくりと戦いたたかに近づいた。

狼たちはアミリの方をちらりと見ました。群れのリーダーは、弱い仲間なかまの一匹に彼を襲うように合図おそしました。光る赤い目をした灰色あいずの一匹の狼が、群れのリーダーはいいろの命令に従いました。

悪魔あくまはアミリに飛びかかった。彼はナイフを引き抜き、灰色の狼の首を深く強く刺した。血は出ず、骨ほねも出なかった。首からは何も出なかった。

刃は黒く もろくなった。狼はあごを大きく開き アミリのナイフもつ腕にかみついた。腕を完全に引きちぎった。アミリの切り口から血が流れ出た。

アルファメスは、傷ついた人間を見た。彼は仲間たちに向かって「俺の獲物だ」と叫んだ。小柄なハイイロオオカミは後ずさりした。そのオオカミはセクウの兄から離れた。幽霊のような足取りでアルファメスがアミリに突進し、アミリの首を完全に抉った。アミリの切断された首は草の上に転がった。その獰猛な黒いオオカミはあたりを見回した。突然、灰色のオオカミが群れの中に戻ってきた。光り輝く男に襲いかかった。

「ハンター！」と神秘^{しんぴ}の兵士が叫びました。そして、輝く斧をセクウの手に投げました

セクーはそれをつかんで狂戦士^{きやうせんし}（バーサーカー）の怒り^{いか}で攻撃^{こうげき}しました。彼は一撃^{いちげき}で灰色^まの狼^ふを真っ二つにしました。その後、2匹の茶色の狼は青い斧で首を失いました。

群れのリーダーはじっと見つめた。彼はセクーに飛びかかり、右腕^{みぎうで}に噛みついた。傷口から血が流れ出ました。セクーは輝く斧を落としました。彼は前に飛び、左手でそれを拾い上げました。

黒い狼はセクーの右腕を噛み続けました。「人間の血はすべての中で最も甘い。」^{もっと あま}
狼が動くたびに、セクーの脳^{のう}には激しい痛み^{はげ}が走りました。セクーは輝く斧で黒い狼^ふの首^おに振り下ろしました。彼は何度も何度も振り下ろした。^{なんと}

5回振り下ろすと、黒い狼の首が落ちた。セクーは死骸しがいに向かって叫んだ。彼は自分の獲物の上に立ち、それにつばを吐きました。「アフラ・マズダえいこうに栄光あれ。」

太陽たいようが上空じょうくうを駆け抜けた。すべてがぼやけて見えました。彼は狼の死体の上に倒れこみました。今日、アミリと彼はアフラ・マズダきゅうでん えんかいの宮殿で宴会えんかいを知っていました。その宮殿には、無限むげんの甘さあまのシラースつが詰まった金みずさの水差しかこで囲まれています。ベールつつに包まれ、宝石ほうせきで飾られた踊り子かざたちが彼を抱きしめ、ダレイオスおど大王こを生み出した神聖しんせいな力こうりゅうと交流する中で、彼を愛しました

太陽、月、そして星く ひろが日々のダンスを繰り広げていました。セクーの息いきが弱くなっていきました。風が彼の傷口を吹き抜けた。
|

彼は少年の頃から夢見てきたように、狩りの栄光の中で死ぬ運命にあった。

暗闇。